## 児童虐待とは…

**本来、子どもを守るべき保護者（親や親に代わる養育者）が、子どもの身体や心を傷つけることをいいます。**

| | |
|---|---|
| 身体的虐待 | 殴る、蹴る、投げ落とす、激しく揺さぶる、やけどを負わせる、溺れさせる　など |
| 心理的虐待 | 言葉による脅し、無視、兄弟間での差別的扱い、子どもの目の前でドメスティックバイオレンスを行うこと　など |
| ネグレクト | 食事を与えない、ひどく不潔にする、家に閉じ込める、保護者以外の同居人による虐待を放置する　など |
| 性的虐待 | 性的行為の強要、性器や性交を見せる　など |

## 子育てに悩んでいませんか？ 近所に心配なお子さんはいませんか？ 迷わず下記、電話相談窓口までご相談ください。

**福岡市こども総合相談センター**（えがお館）

24時間受付（年末年始を除く）　☎092-833-3000

**NPO法人ふくおか こどもの虐待防止センター**（F-CAP-C）

10:00～14:00 毎週火・水・土曜日（祝日・年末年始を除く）　☎092-832-5550

**各区子育て支援課こども相談係**　月～金曜日　9:00～17:00（祝日・年末年始を除く）

| 区 | 電話番号 | FAX番号 | 区 | 電話番号 | FAX番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 東　区 | 092-645-1082 | 092-631-1511 | 城南区 | 092-833-4108 | 092-822-2133 |
| 博多区 | 092-419-1086 | 092-441-1455 | 早良区 | 092-833-4398 | 092-831-5723 |
| 中央区 | 092-718-1106 | 092-771-4955 | 西　区 | 092-895-7098 | 092-881-5874 |
| 南　区 | 092-559-5195 | 092-559-5149 | | | |

## ～つながろう 子どもの笑顔のために～

### 福岡ソフトバンクホークスも応援します！

子どもは、私たち社会のかけがえのない宝です。
子どもの虐待という悲しい事件が後を絶たない今、子ども達の笑顔のために、私たち大人が手を取り合い、行動していくことが大切です。
「つながろう　子どもの笑顔のために」、
皆で一緒に、取り組んでいきましょう。

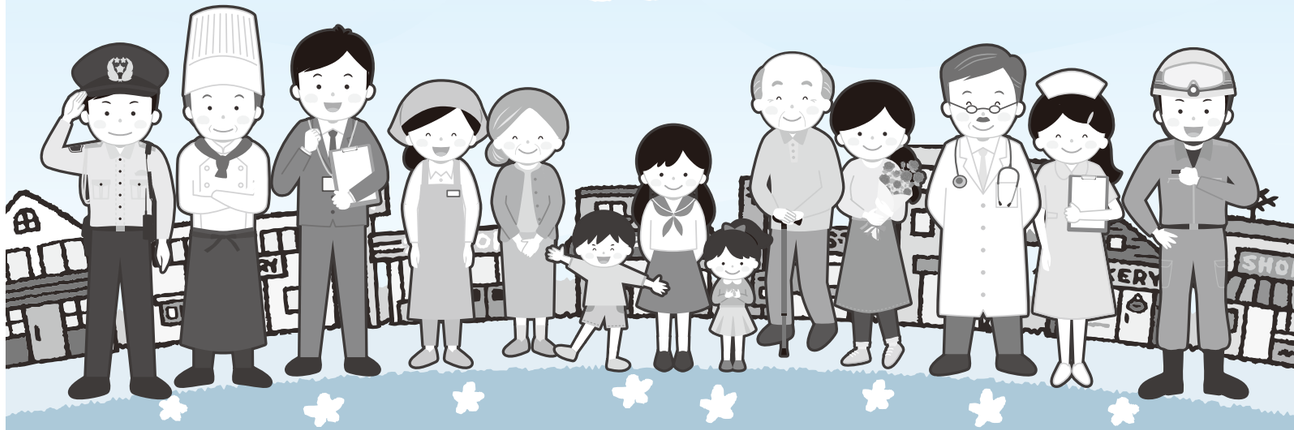
福岡を子どもの笑顔いっぱいの街にしましょう。
僕も、子どもを持つ親として、そして1人の大人として、
この活動を一緒に応援していきます！

**松田 宣浩**



子ども虐待防止市民フォーラム

# ひとりぼっちをつくらない ～このまちで共に生きる～



平成30年8月24日

# 子ども虐待防止 市民フォーラム

# 報告書

企画・発行／福岡市子ども虐待防止活動推進委員会
事務局／福岡市こども未来局こども家庭課
〒810-8620　福岡市中央区天神 1-8-1　TEL 092-711-4238　FAX 092-733-5534

平成31年2月発行

## 目　次

つながろう　子どもの笑顔のために …… 2

子ども虐待防止市民フォーラム概要 …… 3

基調講演 …… 4

トークセッション …… 14

参加者アンケート・パネル展 …… 24

# つながろう　子どもの笑顔のために

福岡市子ども虐待防止活動推進委員会は、市民、地域、関係団体、行政が一丸となって、児童虐待防止に向けた取組みを推進するため、平成22年5月に、子どもに関わる団体と福岡市が協働で発足しました。「つながろう　子どもの笑顔のために」を合言葉に、関係機関の連携強化とともに、市民フォーラムや専門者向け研修、相談窓口の広報などに取り組んでいます。

このフォーラムは、虐待防止のためにそれぞれの団体や個人で何ができるのか、その活動のヒントになればと思い、毎年開催しているもので、今回は9回目となりました。フォーラムの内容については、ワーキングメンバーで企画し、当日は、子どもに関わる様々な機関や団体の方、地域の方など、約450人に参加いただきました。子どもや家族の置かれた厳しい現状と、実際の地域での取組みなどを聞き、一人ひとりが、子どものためにできることを考え、そして行動していくことの大切さを実感し、多くの方が同じ気持ちでいらっしゃることを心強く感じました。

このような思いと様々な団体、個人の行動が福岡市全体につながっていくことを願って、フォーラムの内容をまとめた本冊子を発行しました。関係者の方の研修会などでご活用いただけることを願っております。

今後も、福岡市子ども虐待防止活動推進委員会は、このまちの子どもや家庭を支える人とともに、虐待防止に取り組んでまいります。

福岡市子ども虐待防止活動推進委員会

## 参 加 団 体（29団体）

※平成30年9月現在

●一般社団法人 福岡市医師会　●福岡県弁護士会　●一般社団法人 福岡市歯科医師会
●一般社団法人 福岡県助産師会　●一般社団法人 福岡市私立幼稚園連盟
●一般社団法人 福岡市保育協会　●社会福祉法人 福岡市社会福祉協議会
●社会福祉法人 福岡市社会福祉事業団　●社会福祉法人 福岡県母子福祉協会
●福岡大学病院　●特定非営利活動法人 ふくおか・こども虐待防止センター
●特定非営利活動法人 SOS子どもの村JAPAN　●特定非営利活動法人 ワーカーズコープ
●福岡市民生委員児童委員協議会　●福岡市乳児院児童養護施設協議会
●福岡市里親会（つくしんぼ会）　●福岡市保護司会連絡協議会　●福岡県警察本部
●福岡法務局　●福岡人権擁護委員協議会　●公益社団法人 福岡県社会福祉士会
●特定非営利活動法人 にじいろCAP　●特定非営利活動法人 チャイルドライン「もしもしキモチ」
●特定非営利活動法人 子どもNPOセンター福岡
●ファミリーシップふくおか（里親養育支援共働事業実行委員会）
●特定非営利活動法人 青少年の自立を支える福岡の会　●特定非営利活動法人 そだちの樹
●特定非営利活動法人男女・子育て環境改善研究所　●福岡市

# 子ども虐待防止市民フォーラム

つながろう 子どもの笑顔のために

## ひとりぼっちをつくらない
### ～このまちで共に生きる～

**主　　催**

福岡市子ども虐待防止活動推進委員会

**日　　時**

平成30年8月24日(金)13:30～16:30

**会　　場**

エルガーラホール

**参 加 者**

約450名

**内　　容**

●**主催者挨拶**

こども未来局長　小野田　勝則

●**基調講演**

講　師：勝部　麗子さん（豊中市社会福祉協議会コミュニティソーシャルワーカー）

●**トークセッション**

ゲスト：谷村　幸子さん（ななっこ料理道場運営委員会代表　民生委員・児童委員）
堀井　智帆さん（福岡県警察本部　福岡少年サポートセンター少年育成指導官）
井上　幸雄さん（アジアに生きる会・ふくおか会員、移住者と連帯する全国ネットワーク運営委員、移住労働者と共に生きるネットワーク・九州共同代表）

コーディネーター：松浦　恭子さん（特定非営利活動法人 ふくおか・こどもの虐待防止センター）

●**呼びかけ**（アピール文の朗読）

三宅　玲子さん（特定非営利活動法人 チャイルドライン「もしもしキモチ」）

●**司　　会**

佐川　民さん（福岡県弁護士会）

# ひとりぼっちをつくらない

## ～このまちで共に生きる～

平成30年8月24日（金）

**勝部 麗子 さん** 豊中市社会福祉協議会コミュニティソーシャルワーカー

講師プロフィール

大阪府豊中市生まれ。豊中市社会福祉協議会に入職。大阪府のコミュニティソーシャルワーカー（CSW）設立事業の第1期生。制度の狭間で支援の行き届かない人々の支援を、地域住民の力を集めて実現する活動を行っており、その姿勢は全国の地域福祉の関係者に大きな影響を与えている。

平成２６年４月から放映のＮＨＫドラマ１０「サイレント・プア」のモデルであり、７月には同局「プロフェッショナル仕事の流儀」にも出演。著作に「ひとりぼっちをつくらない」など。

福祉をやろうと思ったもともとの原点は、教育実習に行ったときのことがきっかけでした。実習先に毎日毎日忘れ物をしてくる子がいて、先生がもうちょっと気をつけなさいということを指導されていました。私がその子に話を聞いても口が重い。今考えると、多分、その子のおうちはゴミ屋敷だったんじゃないかと思います。どこに何があるかわからない、管理ができていないという状況で、毎日なかなか準備が出来ない。ネグレクトの状況だったかもしれません。また、毎朝毎朝遅刻してくる子がいる。事情を聞くと「うちな、お母ちゃんが朝まで働いてんねん。お母ちゃんが帰ってきてから一緒に寝るから、朝起きられへんねん。」とのことでした。スタートラインにすら立てない子どもたちがたくさんいると知り、子ども達がスタートラインに立てるために福祉でサポートしたいとの思いから社会福祉協議会で仕事をさせていただいています。

## 「制度の狭間」の人々を「断らない福祉」で支える

### ◆コミュニティソーシャルワーカーの仕事

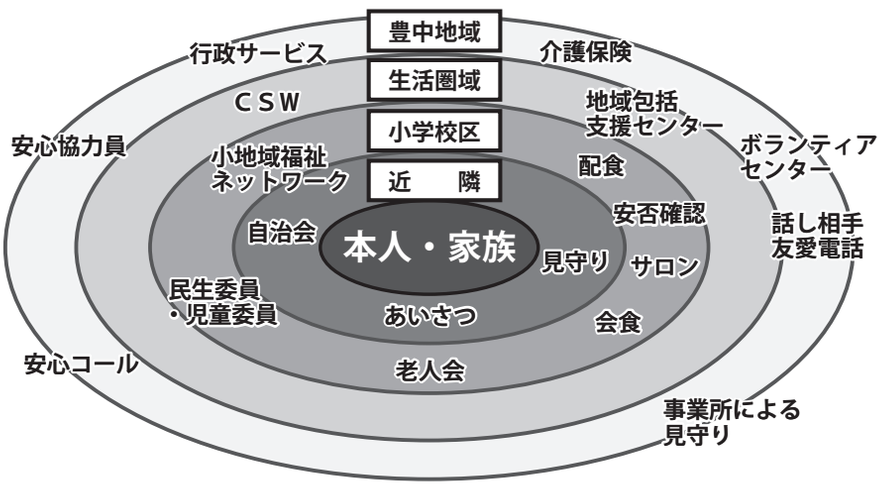
コミュニティソーシャルワーカー（CSW）は、「制度の狭間」の人々を支えていく仕事です。これまでの福祉は、高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉、生活保護というような、いわゆる基準があって、そこに当てはまる人をサポートしていくという考え方でした。しかし、基準に当てはまらない人たちの中にもいろんな問題があります。その人たちの声は「声なき声」としてなかなか上がってこない。こういう人たちを何とか見つけ出して支えていく＝地域づくりをしていく。そんな取り組みが平成16年に全国に先駆けて大阪でスタートしました。裏を返しますとそれほど大阪のまちは子どもの貧困の問題も含めて厳しい課題がたくさんあるということでもあります。

支える制度がない「制度の狭間」の人を助けようと思うときには、地域の人達の協力が必要となります。また制度間の狭間をつくらないように関係機関同士も連携しないといけません。こうした理由から私たちコミュニティソーシャルワーカーは住民や機関との協働をすすめています。

### ◆制度の狭間とは

豊中のまちは、平成7年の阪神淡路大震災で大きな被害を受けました。17万世帯のうちの1万5千世帯の家屋が全半壊しているんです。一部損壊も含めますと7万5千世帯ぐらいですから、2軒に1軒は何かの被害があったということです。それ以降、震災で

# 豊中における見守りの方法




被害を受けた人や問題を抱えた人を見守るということを本格的に始めました。それまでは何となく見守りを続けていたけど、こんな状況ではそれではだめなんです。この震災後から一人一人をちゃんと見守っていこうと取り組みを始めました。

見守りを行っていくと、地域の人たちはいろんな課題を発見してくれます。ここはひとり暮らしの高齢者がいる、ここは認知症の人がいる、ここは老老介護の人がいると見つけてくれる。でも、「制度の狭間」の問題がここで出てくる。たとえばゴミ屋敷の問題を抱えている人がいて、市役所に相談すると、「その方は何歳ですか。」と聞かれます。「61歳です。」と答えると「じゃあ、高齢者じゃないですね。障害者ですか。」となる。「障害があるかどうかわかりません。」と答えると「ああ、そうですか。じゃあ、ゴミのことだから環境部にかけてください。」と環境部に回される。それで環境部にかけると「ご本人はそれらをゴミって言ってますか。」と聞かれて、「本人は宝と言っております。」と話すと「本人がゴミと言わなければ、勝手に捨てるわけにはいきませんよね。」と、こういう話になるわけです。これが「制度の狭間」ということです。ひきこもりだってそうです。ひきこもりの若者は保健所やハローワークに相談に行くように言われても、それが出来ないから困っているわけです。こうした「制度の狭間」の問題がたくさんあることがわかってきました。

問題を発見した後の受け皿の問題も見逃せない課題です。地域の見守りというのは、真面目にやっている人ほどたくさんの問題を発見します。問題がいっぱいで、あそこにもある、ここにもあると心配でたまらないわけです。ちょうど制度のストライクゾーンにはまるような問題を発見した時はちゃんと市役所の人が受け取ってくれるけれども、そうじゃない問題を見つけた時には自分で奔走することになってしまう。先ほどみたいに、あっち行ったり、こっち行ったり。そうすると、だんだん家族にも怒られて、「おまえが余計なことまで首を突っ込むから大変な目に遭うんだ。適当にしとけ。」と言われる。

地域の見守り活動を一生懸命やり始めた豊中のまちで10年経った時に起きたのは、問題を見つけても誰も見ていなかったら掘り起こしたものを埋め戻すということです。つまり見て見ぬふりが始まるわけです。自分が言ったところで解決するかどうかわからないし、そっとしておこうということになる。例えばホームレスの人を見かけたところで、自分がその人の就職までお手伝いできるわけじゃないから見て見ぬふり。今、日本中でこの見て見ぬふりが始まっているんです。

**◆断らない福祉への転換**

生活困窮者自立支援事業のスタートは「断らない福祉」への大きな転換でした。生活保護になる手前のところでのサポートを行う生活困窮者自立支援事業は3年前からスタートしました。この法律をつくる際に、私は厚労省の委員として一生懸命議論しました。これまでの福祉は、「あなたはこの制度に当てはまります」「あなたは当てはまりません」と言って、当てはまる問題だけサポートする形でした。それが、この事業では当てはまる問題だけサポートをするのではなく、全て引き受けるということを目指そうという事になりました。

地域の人たちで助け合いをしようというのはずっと言っているわけですけれども、住人だけに任せられると負担が大きい。地域の問題を発見する「発見力」と、発見した問題を解決する「解決力」は車の両輪です。発見だけしろと言われても、解決の部分が消極的だと絶対うまくいかない。そこで、解決力を支えていく体制を作ろう、「断らない福祉」をやっていこうという背景からコミュニティソーシャルワーカーが置かれました。解決できない問題はもちろんあるけれども、問題を抱えている人たちをサポートするための仕組みを作っていくことで、1人も取りこぼさない事を本気で目指しています。今、この取り組みが全国に広がっています。

そうして「断らない福祉」で問題に取り組むようになり、我々が想像していた以上に子どもの問題が深刻なことがわかってきました。

## 厳しい状況にある子どもたちとその家族

**◆子ども達を取り巻く生活環境**

たとえば、夏休みになると体重が減る子がいます。給食がないからお昼ご飯が食べられない子たちが出てくるわけです。お母さんがご飯を作っていない。また、お母さんがお金を渡している子たちも、コンビニに行って食事を買うのではなく、ほかのものにお金を遣ってしまい、食べていないということもあります。電気、ガス、水道がしょっちゅうとめられている家があって、お母さんに話をすると、「夏場は別にガスぐらいとまっても水で洗えばいいから」なんてことを言っている。こんな実態が豊中のまちにもあります。夜間、留守番をしている子どもたちもたくさんいます。母子家庭で、お母さんはお昼の仕事をするよりも、夜の仕事をした方が効率よく稼ぐことができる。その結果、子どもにご飯を食べさせてから、もう一回夜出ていく。そうしたダブルワーク、トリプルワークをしているお母さんたちがたくさんいて、夜間に留守番をする子どもたちもそれだけいます。

そして、家の中が片づけられない、いわゆるゴミ屋敷状態になっているおうちもあります。豊中のまちではゴミ屋敷の問題に対してのサポートを平成16年から開始して、既に500件ぐらい解決をしていますが、最近は母子世帯のおうちでゴミがいっぱいたまっているところで乳幼児が生活しているという実態にもたくさん出会うようになりました。DV被害に遭い、親子で逃げてきた家族もいます。本当に厳しい状況にある人たちは、関係機関が見守りを始めると拒否感が出て、サポートを受ける体制になる前にまた引っ越してしまう。そうして支援がどんどん切れてしまう。こういう家族の支援も考えないといけない問題です。

また、外国人の子どもたち、外国にルーツがある子どもたちが随分増えてきました。福岡もアジアからたくさんの留学生が来られていると思いますが、豊中のまちも留学生の人たちの一群があります。また、就労のために外国人労働者としてやって来た人たちも多い。そうした外国人労働者の生活支援も始まっています。ブラジルの親子だけど子どもは大阪弁しかしゃべらない。母国の言葉を十分に話せない、アイデンティティーのない子どもたちが随分たくさん出てきている。違うおうちでは、フィリピン人のお母さんで大阪弁で話すことは出来るけど、読み物はまったく読めない。学校からのプリントは全くわからないし、近所の回覧板もわからない。地域のルールが全くわからない。こういうお母さんや子どもさんは地域の中でどんどん孤立をしていくことになります。

子どもの居場所

**◆本当の意味での子どもの貧困**

今、日本中で核家族化が進んでいます。核家族はいろんな問題につながります。高齢者の世帯であれば老老介護の問題、そして、高齢者の独居の問題がすぐ生まれます。若い人たちの世帯であればひとり親家庭の問題です。2人で子どもを育てるのも大変ですが、ひとり親で、働いて、家事や育児もして、地域のつき合いもしてという事が本当にどこまでできるのかという話になるわけです。近所で助けてくれる人たちがそばにいればいいですが、もし何か起きたときに子どもを置いて仕事に行かないといけなくなる。おじいちゃん、おばあちゃんが面倒を見に来てくれればいいですけど、いなければ自分でどうにかするしかないことになります。追い詰められます。追い詰められて、イライラして、いろんな問題を起こしていく。虐待をやりたくてやっている人はいない。虐待をしたいと思って手を出しているわけじゃない。追い込まれて手が上がったら止められないということになるわけです。そこで「もうそれぐらいにしとけ」とか「あんまり怒っても仕方がないじゃない」と言ってくれる人がそばにいればそうかなと思えます。だけど、この止めてくれる人たちを、誰がどうやって作っていくのかという話です。ここがまた大変です。

最近では自治会の組織率がどんどん下がっています。それに加えてマンションの増加です。マンションのオートロックの中に入ってしまうと、誰もその中の問題がわからなくなっていく。たとえば、子どもの泣き声がすると、我々や地域の人たちや民生委員さんたちは心配だから見に行きます。オートロックを解除してもらいにいくと、「少々お待ちください。理事長と相談いたします。」と言われ、さらには「理事長は今仕事ですので、夕方までお待ちください。」となる。夕方まで子どもが泣き続けるのかという話です。こんな風なまちになっていることの不幸がある。

一番厳しい問題は何かというと、人間関係の貧困、特に文化的貧困の問題があります。これまで子どもの貧困の問題では経済的困窮についてよく取り上げられていましたが、実は文化的貧困の問題も大きい。子どもは家族のやっていることしか見ることができません。他の家族と触れ合うことがないから、自分の家族が、例えばコンビニで買ってきたものをチンして食べることしかやっていなければ、その家族の子どもは大人になって料理を作るようになるわけではありません。季節の行事についても、やったことがない人が突然そんなことができるわけがない。「群れる」ための場を地域の中に用意して、自分の家族以外にどんな大人がいるのかをみられるようにする。そんなつなぎ方をしない限りは、子どもの貧困の連鎖というのは断ち切れない、経済的な困窮だけが問題ではないと考えるようになりました。

**◆「群れる」場所をつくる**

校区の中で、0歳から2歳くらいまでの子どもさんたちの集いの場を作りました。いわゆる子育てサ

ロンです。豊中のまちでは平成9年から始めました。そのころ、「公園デビュー」という言葉がよく使われていて、公園デビューを成功させるためのマニュアルなんてものもありました。どんな服を着ていけとか、ご主人の仕事を聞くのは禁句とかいっぱい書いてあるのでプレッシャーに感じるお母さんもいます。そうやって公園デビューしにくいお母さんたちがだんだんいっぱいになりました。今日も友達ができなかったと悩んでいるお母さんたちもたくさんいる。私たちは何とかしたいということで、お母さんたちがそこに行けば同じ年代や境遇の人に出会える、出会いの場として子育てサロンを始めました。今は高齢出産も多いです。そうなると、おじいちゃんやおばあちゃんもさらに高齢ということになり、子育てのサポートが出来ない。また、お母さんが高学歴で、仕事や勉強は一生懸命やってきたけど、子育てはうまくいかないと感じている人たちもいます。こうしたお母さんたちを子育てサロンなどでサポートしています。

学童期の子どもたちに対しては子ども食堂で応援を始めました。始めた頃、地域の人は「子ども食堂なんてやってどうすんのや。」「子どもに飯も食わせんような人が子育てなんかできるのか。」など反対意見もいろいろ言っていました。でも、子ども食堂をやりだすと子どもの置かれている環境はこういうことなのかと、子どもに関心を持つ大人が増えました。これはとても成果があったように思っています。子ども食堂の事例については後からまた触れます。

地域の拠点として、最近は空き家を高齢者のサロンとして利用しています。マージャンをやったりしていますが、参加しているのは全員女性です。男性はなかなか家から出てこず参加してくれません。そこで始めたのが「豊中アグリ」です。アグリは農業、つまりアグリカルチャーのことです。定年後の男性を集めて農業をしています。私の講演を聞いた人が無償で土地を貸してくれたので今はそこでキュウリを作っています。豊中アグリでは90人ぐらい男性が参加しています。この人たちは大阪北部地震では倒れたタンスを起こして歩いてくれるなど大活躍しました。

男性をみんなでつながるようにするのは難しかったです。何を植えるか決める時もナスがいい、カボチャがいいと意見が分かれる。「皆さんで話し合って決めてください」と言っても話し合おうとしない。しまいには「50センチずつ土地を分けてもらっていいですか。」と言う人も出てきます。それぞれに競争させた方が生産性が高まるということでした。「競争社会」で生きてきた人を「共生社会」にせなあかんわけです。みんなでつながるということを考えていこうというのがなかなか難しい。そこで、豊中アグリでは共同作業をする中で、仲間づくりと健康づくりと、そして社会参加を広げていくことをやっているんです。

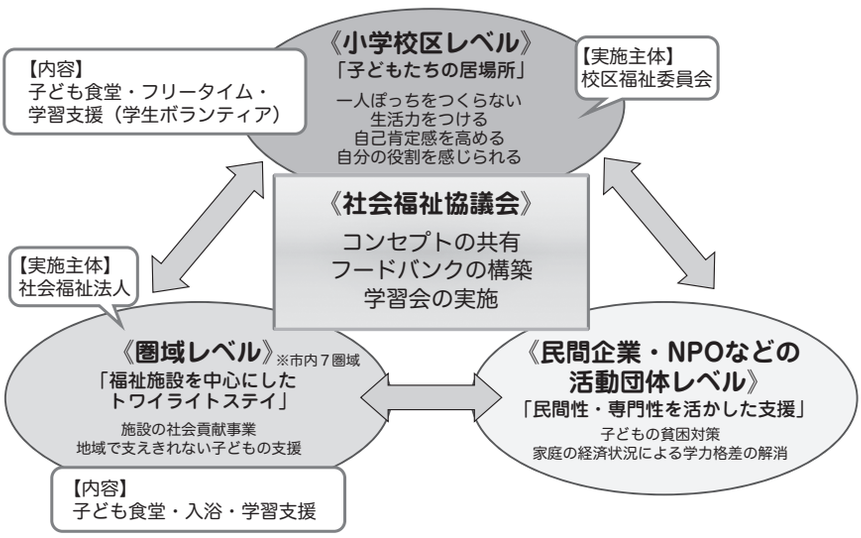
豊中アグリでは流しそうめんをやったりもしています。流しそうめんの道具は参加している男性がCADを使って図面を描いて作りました。立派なものなので、子ども食堂にレンタルしています。栽培したスイカや野菜も子ども食堂に供給しています。いろんな形で群れさせるということを社会福祉協議会の中でやっているわけですね。

マンションに向けては、サミットを開催しています。マンションの管理組合の理事長さんを集めて、マンションの中でのつながりづくりをどうしたらいいか、助け合いを一生懸命やっています。

大阪北部地震で、マンションでは大変なことが起きました。震度4以上になるとエレベーターが全部止まってしまうので、子どもたちが閉じ込められました。子ども達は学校で地震の練習した時は「机の下に入って身を守れ」と言われていましたが、通学途中に起きた今回の地震では入る机がないのでみんなどうしたらいいかわからずパニックになったんです。そんな大変なこともあった今だからこそ必要だということで、マンションの人たちで、災害の時にどうやったら助け合いができるかの話し合いを持ったりしました。

その一方で、いろんな取り組みをやってもつながらない人がいます。子育てサロンに来てくれたらいいけど、なかなか来ない。そういう人たちの中にはいろんな課題があって、子育てサロンに行っても言葉が通じないとか、子どもに障がいがあるから周り

# こどもの居場所づくり地域福祉モデル事業
# ～子どもの居場所ネットワークの構築～




の子と比較されたら嫌だと思ったりしている。しんどい人ほど余計に群れることができないんです。そういうつながらない人たちは、「ローラー作戦」で地域で発見するということを始めました。

**◆アウトリーチの支援**

ご近所の本当に心配な人たちを私たちが家庭訪問をしてフォローすることをアウトリーチといいますが、最近やっている究極のアウトリーチが「ローラー作戦」です。

3年前の夏に、50代の女性が熱中症で亡くなった事件がありました。亡くなった後、その女性のお宅から、90代のお父さんの白骨が出てきたんです。亡くなられた後もお父さんの年金を受給していたんですね。当時はものすごい大騒ぎになりました。民生委員さんのお宅にマスコミの方が来られて「あなたはなぜ自分の地区の担当の人をちゃんと把握してなかったんですか。」と言われたそうです。その民生委員さんから泣きながら電話がかかってきました。民生委員さんは「私はひとり暮らしの高齢者の家は全部把握していた。でも、80代や90代の親を50代の娘がお世話しているのは当たり前の家じゃないですか。そんな家を見てないからって民生委員を責められたら、もうなり手なんてないです。」と話されていました。私もその通りだと思いました。事件になったおうちは袋小路の一番奥の家で、わざわざ訪ねない限りはその人の家には行くことがないような所にありました。ご近所の自治会も活動していなかった。こうしたおうちの問題を把握できるようにと、全部の家を家庭訪問するローラー作戦を始めたわけです。

ローラー作戦をすると、やはりいろんな問題が見えてきます。昼間から外国人のお母さんが子どもと一緒にいる。「学校は？」と聞くと「今日は私が市役所に行くんだけど、通訳する人がいないから子どもを連れていくんです。」と。別の家に行くと、ひきこもりの若者がいる。その子は漫画が描ける子だったので、「ちょうど社会福祉協議会で漫画を出そうと思ってたんです。」と言って、漫画を描いてもらいました。こうやってひきこもりの若者たちをスカウトして歩いて、その子ができることから社会参加を生み出しています。今までに100人ぐらい家から出てこられて、40人ぐらいはお仕事に就いています。

困っている人でも自分から「助けて」と言ってくれる人は少なくて、どこに相談していいかわからないという人たちも大勢いるので、いろんな地域の人と力を合わせてマップを作ったりしながら困っている人の把握をしています。

## ひとりぼっちをつくらないために

**◆居場所や役割をつくる**

ある時、中国人のお母さんとAくんという男の子で暮らしているご家庭のことで学校の先生からご相談がありました。お母さんが夜働いているようなのでお昼のお仕事にかわってほしい、何とか連絡できないかなと思っているとのことでした。

そのお母さんは日本語がほとんどわからない方でした。そのことで、Aくんはお母さんのことをばかにしていたんです。「うちのお母さんは日本語がわからない。うちのお母さんは宿題を見てくれない。あんなお母さんはいないほうがましだ。」と家の中ですごいけんかをしていました。お母さんは、学校の先生とは言葉を交わさない、友達ともお話をしないなど消極的で地域から孤立していると理解されていました。

先生と話し合って、参観日でお母さんが学校に来ている日に、たまたま私も学校に打ち合わせをしに来ていたという形でお母さんと話をしました。私がお母さんと一緒にお話をしている中で、私が「お母さんは中国の方だからギョウザをつくれるの？」と聞いたんですね。すると、お母さんは「ギョウザつくるよ。皮からつくる。」と答えてくれて、「すごいね。じゃあ、ギョウザ教室をやってください。」という話になりました。

土曜日のお昼にギョウザ教室を開きました。ギョウザ教室の生徒は、校長先生と教頭先生、担任の先生と主任児童委員、私の5人です。みんなでお金を出し合ってギョウザを作っていたんですが、お母さんが上手にギョウザを作ってくれるんですね。その結果、おいしいギョウザができたんです。みんなが「おいしい、おいしい。」と口々に言っていました。その様子を見たAくんは、自分のお母さんは先生たちの先生だと思ったんでしょう。お母さんの横に寄っていって、「お母さん、かっこいい。」と言ったんです。

そのことをきっかけに、先生方のお母さんへの見方や取り組みが変わりました。お母さんを「困った人」だと思っていたけど、本当は「問題を抱えて困っていた人」なんだと。お母さんは周りの人にはうまく言葉が通じない、自分を理解してくれていないと思っていたから、ヨロイを着ていた。それがみんなと一緒に楽しい時間を過ごしたことで変わりました。担任の先生は「今度の人権研修の時間にお母さんに中国語の講座をやってもらおうと思うんだけど、どうですか。」とお母さんに言ってくれるようになりました。私が「いいですね。じゃあ、お母さんお願いします。」と言ったら、お母さんが「私一人じゃ嫌です。勝部さんと一緒じゃないと。」と言われて、それで私たちは一緒に子どもたちの前でお話ししました。講座では中国語で話すわけですが、クラスで中国語を一番わかっているのはAくんですよね。そのことでクラスの中でAくんの居場所もできていったのも嬉しいことでした。

**◆引きこもりの子のステップアップ**

ニートや引きこもりなど就職ができない子どもたちの支援の問題ですが、長らく働いてない人や昼夜逆転している人たちは突然就労できないので、そういう人たちを段階的に応援していくために、アウトリーチから一般就労までステップアップで取り組んでいます。アウトリーチというのは家庭訪問です。家庭訪問をするんですけど、「助けましょうか。」と言われたら相手は「うざい。」、「訓練しましょうか。」と言われたら「面倒くさい。」「そんなとこ行きたくない。」と思うので、我々はスカウトをしています。「折り紙しか折れない」と言われたら、私たちが「ちょうど折り紙を折ってほしかったんです。」と言うんです。社会福祉協議会で出している漫画の本を描いてくれた彼女は20年引きこもっていた子でお母さんが悩みながら相談してきました。その子は昔、美大に行ったけれども、その後ずっと家に引きこもっていたという話を聞いたので、「私たちのこの本、次の本を出したいけど描く人がいなくなったので助けてくれないかな。」とお願いしたんです。翌日から彼女は出てこられるようになって、今は就職しています。誰と出会う

子ども食堂

かによってその人の人生は変わりますが、もっと早くにいろんな人たちに出会っていればその子の20年が変わったかもしれないと思います。

「豊中びーのびーのプロジェクト」は発達障害や引きこもりなどで就職に距離がある人向けの就労に向けた支援プロジェクトです。彼らには参加したいプログラムに参加してもらいます。活動費は2時間500円です。公的資金がないので漫画を売ったお金をこの活動費に充てる形で応援しています。ある程度できるようになったら、地域のいろんな事業所さんに職親としてお手伝いをしてもらって、彼らが働けるように応援していきます。去年の6月からはお店も始めました。ひきこもりの若者たちが買い物困難地域で空き店舗を使ってお店をします。小売商業団体の人たちから仕入れをして、そして仕事をしています。支えられていた人が支え手にかわっています。彼らが社会を変える一員になっているということです。

就労体験、就労準備、そして一般就労へとステップアップしていきます。一般就労できるようになっても、OB会で集まる様にしています。この夏は特別に暑かったですが、OB会に背広を着てかばんを持って、「ああ、疲れた」と言いながら帰ってくる若者たちの姿を見たら涙が出ます。彼らのほとんどは、真っ暗な部屋で、親と向き合えずに家庭内暴力をしながら、壁をたたいて暮らしていた子たちでした。そんな子たちが社会に出てこられるように応援をしています。

**◆人に優しくされた人は優しくなれる**

ひきこもりの問題以外にも子どもの問題にはいろいろあります。お弁当を持ってこられない子どもがいました。これは学校の先生から連絡を受けたケースでした。彼女はお弁当の時間になると、いつも廊下に出ていくんですね。先生が「お弁当は？」と聞いても、彼女は「お腹すいていない。」と答えることを繰り返していました。ある時、先生がおにぎりを作って持っていくと、彼女がものすごい勢いで食べていて、本当はお腹が空いていることがわかりました。でも、先生が本人に話を聞くと、彼女は「お母さんのことは悪く言わんといてほしい。」と話す。先生は家の事情がよくわからなくて、虐待なのかどうかわからない。どう相談したらいいのかわからないということでご連絡を受けました。それで、私たちが夕方に学校に行って、クラブが終わったぐらいの時間に本人から話を聞きました。すると、彼女は「お母さんは三つ働いている。朝も昼も晩も働いている。でも、生活ができない。お母さんを責めんといてほしい。」と話すんですね。それで、彼女のことを助けたくて子ども食堂を始めることにしました。

最初はフードバンクの食材を持って家に行きましたが、食材やお菓子を持っていると「盗んだと思われる。」と彼女は心配しました。それで子ども食堂を始めることにしたんです。

まず彼女だけでなくお母さんも含めて親子で子ども食堂に誘いました。お母さんは知的な力が少し

低く、生活保護の制度のことなどを十分に理解されていなかった。市役所に相談に行っても相手に自分の状況をうまく伝えることが出来なかったそうです。それで今の生活状態を続けるのも仕方がないと思っていた。それを聞いて、私たちがお母さんと一緒に申請に行きました。その結果、生活保護を受けられるようになりました。彼女は携帯電話を持つことができるようになり、友達との交流が始まりました。修学旅行にも行けました。

それから1年が経ちました。生活が整ってから彼女はめきめきと勉強がわかるようになりました。もともと彼女のおうちは学習できる環境ではなくて勉強をぜんぜんしていなかったので、伸びしろがものすごくあったんです。中3になると、彼女が私に「勝部さん、もっと勉強したいねんけど。」と言うようになり、何とかしようということで、今度はボランティアでサポートしてくれる人を見つけて学習支援を始めたんです。勉強するようになると、平均点が10点上がったりと成長がすごかった。いよいよ入試を迎える日には子ども食堂のボランティアの人がトンカツの入った「勝ち弁当」を作ってくれました。私もお守りを作り、渡しました。入試は見事合格。その時の子ども食堂のご飯はお赤飯にかわりました。

子ども食堂を始めるにあたって、地域の人々からはいろいろ賛否がありました。でも、最終的には彼女のような子どもたちを助けられるなら頑張ろうということでやっていただき、彼女が成長していくことを喜んでくれた。彼女はこの春から子ども食堂のボランティアをしています。人は人に大事にされたら人に優しくなれる。子ども食堂の取り組みからはそんなことを感じます。

ある時、夜中にスーパーでうろうろしている女の子がいるという話がありました。少年補導センターの職員が家庭訪問すると、おうちはゴミ屋敷状態でした。お父さんとお母さんは離婚されていて、お父さんが彼女を引き取ったのですが、お父さんは荷物を全部置いて違う土地で働いていました。それで父方のおばあちゃんと彼女で暮らしていたのですが、おばあちゃんは体が弱く、視覚障害がありました。ゴミ屋敷状態の家での2人の生活はとても続けられないのではと心配の声が上がり、児童相談所が彼女を一時保護して児童養護施設に入所させた方がいいのではという話も出ていました。

そんな中、私たちは地域の皆さんと一緒に彼女のおうちの片づけをしました。彼女のおうちは6畳と4畳半と2畳の板の間のおうちでしたが、片づけをして2畳の板の間を彼女の部屋にしました。机がなかったのでカラーボックスを横にして、そこに教科書を立てられるようにしてちょっとした机を作りました。彼女は近所の人たちに「おばちゃん、見て。私の机ができてん。」と話しに行きました。けなげな話でした。その後もヘルパーさんたちと一緒に彼女のおうちを一生懸命サポートしました。学校があっている間は給食があるので良いんですけれど、夏休みになって学童保育に行っている間は家庭でお弁当を用意しないといけません。さすがに彼女の分のお弁当までは作れない。すると、ご近所のボランティアの人たちが代わる代わる彼女のお弁当を作ってくれました。そうやって彼女が低学年の時までは何とかサポートが出来ていたんですが、彼女の年齢が上がっていくと、おばあちゃんとの暮らしがだんだん厳しくなってきました。どうしようか、もう無理なのだろうかと悩んでいる時に、地域の方が言ってくれました。「この子を一日も長く、家庭で生活させてあげたい。」「子どもが大人になって、自分の家庭を築く時のために家庭のイメージを持っていて欲しい。」と。そのために我々ができることを応援しようということで、地域の方々がいろんな形で最後までサポートをしてくれました。今もおばあちゃんと彼女の関係は良好です。

**◆ひとりぼっちをつくらない**

社会的孤立、孤独ということがいろんな問題を生んでいると思います。孤独になるから自殺が増える。孤独になるから虐待が出る。孤独になるから孤立死が出てくる。そこを考えると、人と人とをどうやって群れさせていくかを本気で考えない限りは、世の中がどんどん大変になっていく、そう思います。

私たちは一人で変わっていくことはなかなかできません。支えていく人たちが周りにいることによって変わっていくことができるんです。子どもの問題も、高齢者や障がい者の問題もみんな同じです。一人で生きていくって、なかなか難しくて気持ちが折れそうになります。もうこれ以上頑張るのは無理と言う状態の中で生きている。特に子育て中の世帯にはそういう人たちがたくさんいるわけです。そこに皆さん方が少し声をかけてくれる。みんな、「低空飛行」です。急にぐんといい暮らしになんてならないです。でも、諦めないで何回も何回も声をかけてくださる中で、ちょっとずつよくなっていく変化を喜び合える、そんな社会にしていくことがとても大事なんじゃないかなと思っています。

最後ですけど、私は大学を卒業してからずっとこの仕事に就いています。地域の活動は土日や夜間の集まりが多いので、この仕事をしていると家で過ごす時間がなかなかとれないことが多いです。私には子どもが3人います。子ども達の保育所は3人それぞれ別々で、朝1時間半、3か所の保育園をまわって子どもを送っていくんです。そして夕方、また1時間半かけてお迎えに回ります。それから家に帰ってご飯を食べさせて、子どもを主人にバトンタッチして、また職場に行くという生活でした。もういっぱいいっぱいですよね。ある時、車に乗って家に向かおうとしていた時に、夕日が落ちていくのが見えました。きれいな夕日でした。夕日を見ていると、何だか前が見えなくなって、目がゆらゆらゆらゆらしてきて、車の中で「お母さん、もう仕事やめようと思う。」と言ったことがあります。そうしたら、ちょうど年中になっていた次男が「お母さんがやめたら、『寂しいな』って思う人が増えると思う。」と言ったんです。我々の活動や地域の活動は何をしているのかと時々ふと考える事があります。困っている誰かのことを助ける、支援をしていく。そういうこともやっているけれども、それだけではなく、次男が言ってくれたように「『寂しいな』と思う人」を少なくすることなんですね。「ひとりぼっちをつくらない」という仕事です。そのためには、たくさんのサービスや制度を作ることも必要ですが、そういう人たちを支えていく仲間作りをもっともっとしていくということが大切なんじゃないかなと思います。そう思うようになって、ぶれないで今でも仕事が続けられるようになっています。

私たちのまちも厳しいまちです。ですから、いろんなことを一生懸命考えて、工夫をしています。何か特効薬があるような取り組みでは決してありませんが、たくさんの人たちが声をかけ合う、そんなまちにちょっとずつなってきています。これからも私のまちでまた頑張っていきたいと思います。この福岡のまちも、今後さらによいまちになっていくことを祈念しまして、お話を終わりたいと思います。ありがとうございました。

**ゲスト**
**谷村 幸子 さん**
ななっこ料理道場運営委員会代表
民生委員・児童委員

プロフィール

七隈公民館にて小中学生対象の料理教室「ななっこ料理道場」を開催。
「おなかがすいた時に自分で料理を作って食べられるたくましい子に」という願いから地域住民の力を結集。子どもたちが高齢者や大学生など異世代と交流し、安心できる居場所づくりを行っている。

「ななっこ料理道場」は、子ども達がおなかがすいた時に自分で料理を作って、食べられる力をつけてあげられるように、自宅にある材料でできる簡単な料理を学んでもらおうという活動です。小中学生を対象に毎月1回、主に土曜日の10時から12時まで料理を作り、みんなで一緒に食べます。

この活動を始めたのは、子どもの貧困や児童虐待の問題が深刻な昨今、この七隈校区にも悩みがあっても誰にも相談できない子どもたちがいるのではないか、と思ったからでした。同じ地域に住む大人たちが、子ども達と共に料理作りや食事をすることを通して、子どもたちの居場所作りが出来ればと活動を続けています。

「ななっこ料理道場」の第1の目的は、子どもが、家にある材料で自分で料理を作れるようになることなので小学1年生でも出来る簡単な料理を選び、材料が足りなくてもできる工夫を子どもたちに教えています。例えばカレーを作る時に家にお肉がない場合は缶詰やウィンナーをかわりに使ってもいいこと等を伝えます。

第2の目的は他世代との交流です。料理道場には地域の大人に参加してもらっていますし、近くの大学生や民生委員・児童委員、自治会長も参加します。孫を送って来たおじいちゃんやおばあちゃんで次の予定がない方は「一緒にやりましょう。」と声をかけて巻き込んでおります。

第3の目的は食事を通じて安心できる「居場所」にするということです。作った料理はみんなで一緒に食べますが、食べる時には地域の皆さんとおしゃべりしたり、子ども同士でお話ししたりしています。

この料理道場の実施主体は「ななっこ料理道場運営委員会」です。運営委員やボランティアは趣旨に賛同する地域の大人です。ボランティアの方が手順を説明したり、ピーラーや包丁の使い方なども教えます。

参加料は無料です。「100円か200円の参加料を取ったらどうか。」という意見も出ましたが、たとえ100円でも子どもにとっては参加するたびに親に「お金を頂戴。」と言わないといけないことになります。そうなると足が遠のく子どももいるのではないかと思い、来たい人は誰でも来られるようにしています。

広報については公民館だよりに毎月料理道場の情報を載せています。また公民館では子どもを対象とした他の活動もやっておりますので、そうした活動とも連携して、学校を通して子ども達に情報が行き渡るように心がけています。

この料理道場は平成28年8月から開始してちょうど3年目を迎えます。子どもの参加人数は平成28年度は平均で1回20人くらい、平成29年度は30人くらいと増えてきており、ボランティアの数も増えてきています。

料理の内容は子どもでも作れるメニューにしており、カレー、だんご汁、スパゲティ、豚汁、ギョーザなど様々です。本当は子ども達の希望を取り入れられると良いのですが、どんなものを作りたいかと尋ねると、ほとんどの子どもが「焼肉！」と言うんです。30人近くの子たちがお腹いっぱいになるだけの肉を買う予算がないので、「それは宝くじが当たったらやりましょうね。」ということで、子どもと冗談を

ななっこ料理道場

言っています。

予算については大きな課題でした。当初は資金がなくて、困っておりました。そんな時に区社会福祉協議会の方に「福岡市母子福祉会芙蓉基金」について教えていただきました。早速申請させていただき、立ち上げのお金を13万円ほどいただいて始めることができました。2年目からは校区の社会福祉協議会や環境推進委員会からの寄附を継続していただき、年間18万円の予算で実施しています。地域の方から食材を寄附してもらうこともあります。お米はほとんど買わないでやっています。あとはタマネギ、ジャガイモ、ピーマンなどの野菜や缶詰なども時折寄付していただき、感謝しております。

少しエピソードを紹介させていただきます。小学校1年生のほっそりした男の子のお話です。「この子はもともと食事に全然関心がなかったのが、ななっこ料理道場に参加してから変わってきました。最近、家でもわりと食べてくれるようになり、自分でも料理を作ろうとしていてびっくりしております。」とお母さんが話されていました。

小学2年生の孫と参加されたおばあちゃんから伺ったお話なんですが、ニラギョーザを作った日、家に帰ってからもお孫さんが「またギョーザを作る。」と言って、作ってくれたそうです。同じものを2回食べることになったわけなんですが、おばあちゃんは「とてもおいしかったよ。」とお孫さんを褒めたそうです。そのお話を聞いて、おばあちゃんと孫のほほえましい会話の様子が目に浮かび、とても嬉しく思いました。

「ななっこ料理道場」では、子どもが悩みなど抱えていないか出来るだけ丁寧に見守るようにしています。参加する子どもには必ず名前を書いてもらっていますが、初めて参加する子どもについては把握するようにしています。滅多に公民館に出てこない子が参加してくれた時には意識してこちらから声かけをしています。また、料理を食べた後には「悩みのある人いないかな？」と聞くことにしております。最近ではそっと手を上げる子がいます。そういう時は子どものそばに行って、どういう悩みなのかを聞きます。内容によっては関係機関につないでいます。

最後に、ボランティアの皆さんと取り決めていることをご紹介してお話を終わります。ボランティアの皆さんには、子どもたちがこの道場に来たら、まず「よく来たね」「待っていたよ」の2つの声かけを是非してくださいとお願いしています。また、料理の途中では子どもが上手に出来ているところを見つけてたくさん褒めてあげましょうとお願いしています。こうした点を大切にしながら、これからも「ななっこ料理道場」を続けていきたいと思っています。

**ゲスト**
**堀井 智帆 さん**
福岡県警察本部
福岡少年サポートセンター少年育成指導官

プロフィール

社会福祉士。児童養護施設職員として虐待から保護された子どもにかかわった経験を持つ。問題行動の背景にある子どもの想いや内面への深い理解をもとに，非行など思春期の問題を抱える少年やその家族の立ち直り支援を行っている。

少年サポートセンターは、福岡県警が設置している子どもを支援するための専門機関です。福岡県内には5か所あり、私が勤務している福岡少年サポートセンターは福岡市こども総合相談センターに設置されています。

私のキャッチフレーズは「非行少年大好き。非行少年なしの人生は考えられない、サポートセンターの堀井です」です。もともと私は大学で社会福祉や児童福祉を学んでいましたが、実習で児童相談所に行って一時保護所にいる子どもたちと接した時に衝撃を受けました。私は子どもは家庭で親から愛されて育つのが当たり前だと思っていましたが、たくさんの子どもたちが親から愛されることができず、親も子どもの愛し方を知らないままでいることを実習で知りました。傷ついた子どもたちを救いたい。そんな思いから児童福祉の世界に飛び込みました。

私は小さい頃から「人を見た目で判断するな。」と習ってきました。だけど、金髪にダボダボ服という格好をした子どもたちと街を歩いていると、この子たちが周りの人たちから白い目で見られることがとても多いです。社会は子どもたちを見た目で判断すると、いつも感じます。「何でちゃんとした格好で来させんのか。」と周囲から言われます。私はそんな時、まずちゃんとしないといけないのは、私たち大人の側ではないかと思います。大人がこの子たちにちゃんとしたかかわりをして、その後で初めて「ちゃんとしよう。」と言えるんじゃないかと考えています。子ども達が派手な格好をすることを含めて、子どもたちが起こす、いわゆる問題行動は全て彼らのSOS、メッセージです。なぜこの子たちがその問題行動を起こさなければならなかったのかという背景に思いをはせること、そしてその子たちの傷つきに寄り添いながら一つ一つできることをやっていくこと。そんなことを日々の活動の中で大切にしています。

サポートセンターでは子どもたちの支援だけではなく、親御さんの支援にも力を入れています。子どもたちの問題行動の大きなヒントは家庭や親御さんが握っていることが多いです。幾ら私たちが前面に出て頑張っても、子どもたちが求めているのは私たちではなかったことも多いです。子どもが問題行動を起こしていると、親御さんもダメな親というレッテルを張られていると思い込んで自信をなくし、疲弊した状態に陥ります。そんな親御さんたちを支援して、自信を取り戻してもらえるようにします。そして、支援が必要だけどまだ相談機関につながっていない家庭が今も地域にたくさんあります。そういう「埋もれた親子」を発掘するために、特に幼稚園・保育園での講演活動に私たちは力を入れて行っています。

なぜ幼稚園・保育園のお母さんたちへの講演活動なのか。小中学校の子育て講演会に来られるお母さんは決まっています。もともと子育てに強い関心を持っている方がより学ぶための機会という色合いが強いです。一方で、保育園・幼稚園は子どもを毎日お迎えに行きます。お迎えに行った時にその日の子どもの様子を担任の先生とお話しするので、保育園・幼稚園の方が親御さんと先生方との距離が近いんです。支援の手からこぼれそうなお母さんたちを取り込む力が幼稚園・保育園にはあります。園長先生が、このお母さんにこそ講演を聞いてほしいという人に「今日はお母さんのために堀井さんを呼んだのよ。聞いてってよ。」と誘ったりという具合です。幼稚園・保育園での講演で、「こんなにすばらしい子育てをし

ましょうよ。」ではなく、「子育てって大変だよね、きついよね。」という保護者の方々の言葉を代弁して伝えていくことで、子育てに悩んでいた親御さんが「実は私も。」と声を上げる機会にできるんです。「この人になら相談できる。」と感じられる機会を多くの親御さんが体験することが大切だと考えています。

それから子どもたちが親になった時の子育て支援も大切だと思っています。私たちがかかわる子どもたちは早くに妊娠、出産を迎える傾向があります。15歳～16歳で妊娠することもあります、どうするかと聞かれると、その子たちは「産む。育てたい。」と言います。私はその子たちの産みたいという気持ちも、きちんと大切に育てたいという気持ちも本物だと思います。だけど、気持ちは本物でも、できないことがたくさんあります。支援が当然必要になります、担当した子どもが妊娠して出産をすると決意をしたら、子育て支援にチェンジをしていきます。無事に出産して子どもが生まれたら病院まで行ったり、おうちまで行ったりします。将来その赤ちゃんが思春期になって少年サポートセンターがかかわることがあるかもしれないと想像している部分もあります。早く仲よくなれるように、将来「あんたのオムツ、私が替えたんよ。」とか言おうかなと思いながら訪問しています。そうして家庭訪問をしていると、若年で赤ちゃんを出産した子どもたちがどうやって子育てしているかがよく見えてきます。私はこの仕事をする前は、児童養護施設で2年間働いていたんですけど、その時にかかわった子は16歳で出産をしました。周囲はすごく心配しましたが、その子は何とか頑張っておうちで子育てをしていました。赤ちゃんが10カ月ぐらいになった時にその子が私に電話してきて、「子どもが全然離乳食を食べない。」と言うんですね。「どんな離乳食を食べさせているの？」と聞くと、電子レンジで温めて作るインスタントのご飯に、インスタントのおみそ汁でふやかしたものでした。そりゃ食べないですよね。児童養護施設で育った子どもだったので、まず、お母さんにご飯をつくってもらったことがないんです。自分で料理をする経験もしてこなくて、食べるのはコンビニのお弁当や外食ばかり。自分でご飯を作れないし、ましてや離乳食なんて全然わからないんですよね。ちょうどその頃、私は育児休暇中だったので、「それなら3日ぐらいうちに泊まりにおいで。3日ぐらい3食を一緒に作れば簡単なものなら作れるようになるよ。」ということでその子と赤ちゃんを家に呼んで一緒に練習をしました。おだしからとったみそ汁を赤ちゃんに出したらごくごく飲んで、「うちの子、みそ汁飲まんのになんで飲むと？」とびっくりしていましたが、「作ったら飲むんよ。」と伝えるとそれから家でも料理をするようになりました。その時の赤ちゃんも今は小学生ぐらいになっているんですけど、今も子育てを頑張っています。

私たちがかかわっている子どもたちは、困っていてもなかなか支援に結びつかない子が多いです。これからもそういう子どもたちと若年のうちにしっかりつながって、そこからまた新たな支援につないでいきたいです。

堀井学級の子どもたち

ゲスト
**井上 幸雄 さん**
アジアに生きる会・ふくおか会員
移住者と連帯する全国ネットワーク運営委員
移住労働者と共に生きるネットワーク・九州共同代表

プロフィール

日本に在住する外国人支援のボランティアグループ「アジアに生きる会・ふくおか」の会員として支援活動に従事。特に外国人女性の人権問題、外国につながる子どもたちの教育問題などに取り組む。

私は「アジアに生きる会・ふくおか」というボランティアグループで、外国から来日して日本で暮らすようになった人々へのさまざまな支援活動を行っています。私はもともと市役所に勤務していましたが、教育委員会勤務が長かったこともあって、特に外国につながる子どもたちの教育問題などに力を入れて取り組んできました。またDVに悩む外国人女性の支援など外国人女性の人権問題についても取り組んでいます。

外国籍の妻やパートナーに対するDVはとても深刻です。母国語や生活習慣の違いからくるコミュニケーションの問題などがあるからです。日本の人口全体に占める外国人の割合は約2%ですが、DV被害者を保護するシェルターの利用者の中で外国人の占める割合は10%弱と言われており、このことからも外国人女性のDV被害の深刻さがわかります。

またJFC（Japanese Filipino Children）の問題も見過ごせません。JFCは単に「日本人とフィリピン人との間に産まれた子ども」ではありません。日本人男性の父親が、フィリピン人女性の母親と「結婚もせず、子どもの認知もせず、養育費も払わない」という状況に置かれた子どもたちのことです。このJFC問題は子どもに対する究極のネグレクトだと思います。

他にも技能実習生への賃金未払いなどの労働問題や子どもたちの高校進学などの教育問題にも取り組んでいます。直接的に子どもの虐待問題についての支援を行っているわけではありませんが、活動の中で子どもの虐待にかかわる事柄に直面することがあります。

私が最初に子どもへの虐待に関するケースに遭遇したのは約20年前でした。私たちの会の活動でフィリピンのJFC支援団体を訪問するために福岡空港からマニラに出発しようとした際の出来事です。私たちの会の会員の知人のフィリピン人女性も4人の子どもたちを連れて里帰りするために同じ便でマニラへ行くことにしていました。そこに同じフィリピン人女性のAさんが3歳ぐらいの男の子を連れてやってきました。Aさんは里帰りをするフィリピン女性の友人で、子どもと一緒にフィリピンから来日して東京で日本人の男性と再婚したのですが、夫はAさんの連れ子である男の子に対して虐待を加えていました。そこでAさんは今回里帰りをする友人に頼んで、フィリピンの親戚まで男の子を送り届けてもらいたいと希望していたのです。Aさんは身なりを整える余裕もなくビーチサンダルで東京から福岡空港まで来ていました。男の子はひどく痩せて、腕もとても細くなっていました。その時、私はとてもつらい役目を担わなければなりませんでした。里帰りをするフィリピン女性は自分の子どもが4人いるわけですから、Aさんから預かった男の子の世話をする余裕はありません。結果として私がその男の子の世話をすることになりました。その子を抱いてセキュリティチェックのゲートをくぐる時、母親との別れを察知した男の子は、私の腕の中で、「ママ！ママ！」と泣きながら、必死になって体を動かして、私の腕から逃れようとしました。Aさんも泣きながらその子の名前を呼んでいました。私が母と子を引き裂くような役割をすることになって、とてもつらい思いをしました。今でもつらい思い出です。

他にも、母親がDV被害に遭う様子を目の前で見せられていたことが子どもの心に深い傷を与えていると実感したエピソードがあります。

フィリピン人のBさんは、夫と舅（しゅうと）から、身体的な暴力はないけれども暴言で精神的に追い込まれるような、いわゆる精神的なDVを受けていました。私はBさんと何回も会って話を聞き、相談に乗っていました。家を出てシェルターに入ることも出来ると伝えましたが、まだ5歳の女の子がいることから家を出る決心がつかない状況が続きました。私は彼女の精神的な苦しさを少しでも和らげたいと思い、Bさんと似た境遇を経験したことのある熱心なクリスチャンのフィリピン人女性をBさんに紹介して話を聞いてもらいました。話を聞いた後に、2人が泣きながらお祈りをしたのですが、そうするとそれまでずっとおとなしくしていた女の子が「やめて！やめて！」と叫びながら、そのクリスチャンの女性を叩きに行ったのです。それはもうびっくりしました。なぜその女の子がそのような行動をとったのか、最初は理解できませんでした。しかし、後になって考えると女の子はBさんがDV被害に遭って泣いている光景を何回も目の当たりにしていて「お母さんが涙を流すということはお母さんがいじめられているのだ」と思ってそのような行動に出たのではないかと思うのです。自分の面前で母親が言葉の暴力を受けている、その様子を見ていた娘さんも深く傷ついていたのだと想像されます。この話には後日談があります。彼女は紆余曲折を経て、ついに決心して娘さんと一緒にシェルターに入りました。今では公営住宅に入居して、英会話の教師などをして自立して生活しています。この女性についてはその後、フィリピンから呼び寄せた前の夫との間の子どもの進学問題についても相談を受けました。その子はフィリピンの中学校を卒業していた為、日本で中学校に入学することが出来なかったので、進学できる高校の情報や勉強を私が教えました。結果としてその子は外国からの子どもを対象とした特別入試を受けて公立高校に無事に合格できました。

中国人のCさんは、お子さんが発達障がいを持っていることについて日本人の夫やその両親から理解や協力を得られなくて、すごく追い詰められていました。私が教育委員会で働いていたこともあって、以前からお子さんのことについてCさんから相談を受けていました。ある時、Cさんが3月末から1カ月間中国に里帰りをするという話が出てきました。その時、Cさんのもう一人のお子さんはちょうど中学校に進学する学年でした。そのお子さんは小学校でいじめを受けて不登校となった時期がありました。もし4月下旬まで里帰りをすることになると、中学校入学の最初の大事な時期、学校生活のオリエンテーションがあったり新しい友達関係を作る時期に学校を休むことになります。それはお子さんがきつい思いをすることになり、また不登校にもなりかねないと思ったため、「入学式までには帰って来た方がいい。」というアドバイスをしました。またこれまでにかかわった人の例から、1カ月の予定で里帰りをしても日本への帰国が延び延びになる例も多く、そうなると夫やその両親との関係が悪くなるのではないかという心配もありました。

Cさんがなぜ中国に帰りたいのかと聞くと、このまま日本にいたら子どものことや両親のことでストレスがたまって虐待をしそうで怖い、だから中国に里帰りしてほっとしたいということでした。それだけ追い詰められていたということなんですね。結局、Cさんは説得を聞き入れて入学式の前に帰国することになりました。

以上はほんの一例ですが、外国人の支援をしているとこうしたケースに遭遇することがあります。外国から来日した家族とそのお子さんがこうした大変な状況に陥りやすい状況にあることを皆さんに知っていただいて、参考にしていただければと思います。

**コーディネーター**
**松浦 恭子 さん**
特定非営利活動法人
ふくおか・こどもの虐待防止センター

## 各取組みのきっかけや理念

【松浦】
まずは谷村さんにお聞きします。「ななっこ料理道場」は子どもたちと地域のいろんな大人を巻き込んでの素敵な取り組みだと思いますが、谷村さんがこの料理道場を始めようと思われたのにはどんなきっかけがあったのですか。

【谷村】
当時、小学生で食事を満足にとれていないのではと心配している子どもがいたんです。その子は男の子で身長は結構高いのに体重は30数キロあるかなというくらい痩せていました。私はその子がご飯を十分に食べられていないのではとすごく心配で、その子に食べに来て欲しいということで始めました。それが最初のきっかけです。そして、料理道場がある日の前日には主任児童委員さんと私で「明日は料理道場があるからいらっしゃい」と毎回呼びかけに行きました。呼びかけの際は参加する子どもが来やすいように、「ご飯を食べていない子はいらっしゃい」ではなく、「料理を覚えたい子はみんないらっしゃい」という形で呼びかけをしています。

【松浦】
基調講演の中で、1人のために地域を巻き込んで、地域で支える仕組みを作っていくというお話がありましたが、谷村さんも「その子のために何とかしたい」と考えて料理道場を始められたのですね。堀井さんも様々なお子さんや家族、若いお母さんの支援をしている中で、1人1人のためにいろんなことを工夫されていると思いましたが、どんなことを考えて支援をしていらっしゃるか教えていただけますか。

【堀井】
同じケースは1つとしてないので、その家族に一番合った支援は何かを見立てることが大事だと思っています。そして、失敗があっても許したり、受け入れたりすることも大切だと思います。たとえば、かかわっている子ども達が就職して頑張ろうと思って企業の面接に行ってもすぐに採用になるわけではなく、乗り越えないといけない課題の大きさに気づいて面接に行けなくなることもあります。そうやって行きつ戻りつする。そういう時に「何しようと？」じゃなくて「どうしたと？」と言いながらまた支援していく。そうやって寄り添いながら励まし続ける、こちらの粘り強さが求められるかなと思います。

【松浦】
堀井さんがかかわっている、いわゆる非行少年と呼ばれている子どもたちを街でみかけた際に、ちょっと近づきにくいなと思ってしまう人もいるかと思います。堀井さんがそうしたお子さんたちとかかわる際に実践しているコツのようなことは何かあるのでしょうか。

【堀井】
私が心がけているのは3～4歳の子どもにかけるような言葉と最高の笑顔で話しかけることです。そうすると反発心や反抗心を引き出さないかかわりができるように思います。バイクに2人乗りして走っている子たちに私が最高の笑顔で「大丈夫？」と声をかけると大体子どもは「えー」と驚いた顔になります。子どもたちは自分たちの行動が大人に白い目で見られることを何度も経験してわかっています。そういう大人に対する偏見を覆していきたい。みんながあなたたちを白い目で見るんじゃなくて、あなたたちのことをかわいいと思う、大切だと思う大人

もいるんだよというメッセージをどうしたらあの子たちに伝えられるのか。そうしてたどり着いた答えが、笑顔と「大丈夫？」という声かけです。怒るのではなくて、心配していることを伝える。そういう姿勢でかかわっていけば、きっと子どもたちの心のシャッターはあいていくんじゃないかなと思っています。

【松浦】

堀井さんのお話の中で、存在感を示す格好や行動をしている子どもたちを遠巻きに見るのではなく、その子たちが小さいころからどう生きてきたのか、どんな気持ちでいるのかに思いをはせるというお話が印象的でした。彼らはああいう格好でどんな気持ちを示しているのか、少しお話いただけますか。

【堀井】

子どもたちは自分のうちにあるものに目がいかなくて、自分のうちにないものにすごく目がいくんですね。たとえば、お母さんもお父さんも夜に仕事に行っていて、夜遅くを一人でずっと過ごしているおうちがあったとします。親は親なりに考えて子育てをするために一生懸命に夜も働いているのだけれど、子どもたちが「他の家は夜にお父さんやお母さんがいるのに、自分の家にはいない」と気づくと、寂しさや孤独と感じてしまう。子どもたちはその孤独を埋め合わせるために集まっていくんですよね。派手な格好やバイクで爆音鳴らす子は、たとえ白い目でもいいから見てほしいというサインだと思っています。きっと家庭の中にその子が感じている孤独や寂しさがある。家庭の事情の中で、寂しさを感じている子どもたちなんだという理解を最初に持つことが大事と考えています。

【松浦】

基調講演の中でも話されていたように、孤独が影響を与えているんですね。次に、井上さんにお尋ねします。外国にルーツを持つ方は習慣や言葉の問題から孤立に陥りやすいということ、たとえば日本では入学式に出ることが学校生活になじんでいくために大事だということの理解が少し違うために、孤立してしまうということがあるのですね。外国にルーツを持つ子どもたちの支援を考えていく上で、孤立させないために大事なことはどんなことでしょうか。

【井上】

大事なのは想像力だと思います。外国から来た人は日本の常識を知らないことも当然多いです。でも、私たちが日本人同士で交流するばかりだと、そこになかなか思いが及ばない。そのために意識して想像力を発揮することが大切だと思います。

私は一度、フィリピン人のお母さんたちがたくさん来ている教会で、小学校入学ガイダンスをやりました。その時、私が言ったのは、「入学式の日にはジャージを着て行っちゃだめだよ。」ということです。入学式では記念写真の撮影があるから、ジャージで行ったらとてもつらい思いをする。でも、それを知らないで実際にジャージで行ってしまうお母さんもいる。普段からフィリピン人のお母さんたちの話をなるべく聞くようにして情報収集していて、そういった話も聞いていましたから事前にアドバイスをしました。

外国にルーツを持つお母さんの孤立というのはいろんな面で起こります。特にPTAや保護者会では顕著です。勇気を出してPTAや保護者会に行ったけど、誰も口をきいてくれない。そうして敬遠されてしまうから、もう二度と行きたくないというお母さんがとても多い。先ほどお話しした、発達障がいの子どもに虐待をしそうという話をしていたお母さんもそうです。夫やその両親からも孤立して、子どものことでもなかなかうまくいかない。家庭の中で孤立しているんですよね。彼女の場合はサポートする周りの友人や支え合う仲間のいるグループがあって、彼女が友人に相談したことで、その友人が私につないでくれました。そういうつながりがとても大切ですね。孤立したままだったら、子どもが虐待を受けたり、学校になじめなくて不登校になっていた可能性はすごく高いと思います。

## 一緒に考え合う
## ～知ることによって人は優しくなれる～

【松浦】

コメンテーターの勝部さんは、福岡市でいろいろな活動をされている3名のゲストのお話を聞かれてどのように感じられたでしょうか。

【勝部】

福岡市も豊中市も、場所こそ違うけれども取り組んでいる課題や取り組みへの熱意は同じだなということをすごく強く思いました。

まず谷村さんの取り組まれている「ななっこ料理道場」について。子ども食堂について講演ではあまり深く話せなかったので少し補足させていただきたいのですが、豊中のまちでは3つの形で子ども食堂をやっています。1つは今日お話しいただいた谷村さんたちのように、子どもたちにとって身近で、気軽に来れるようなハードルの低い場所で、周りの大人がその子をずっと見守れるという場所を作っていくという形があります。もう1つは高齢者や障がいをもつ方のためのデイサービスセンターを利用した子ども食堂です。デイサービスは基本的に昼間の活動で、夜間は施設があいていることもあるので、そうした施設で社会貢献活動としてやってもらっています。外国にルーツがある子どもたちや本当に厳しい状況に置かれている子どもたちは、一般的な子ども食堂に来ても、文化の違いという壁から仲間に入ることが出来なかったり、たとえば決まった額のお金を持ってくるなどのルールがお母さんたちに理解してもらえずに難しい場合があります。そうした子どもたちでも利用しやすいように、送迎つきで対応するなどのフォローをしているところもあります。最後に、個人の居酒屋さんで「ご飯を食べていないんだったら食べに来い」と言ってくれて子ども食堂をやっているところがあります。こうしていろんな大人の人たちが子ども食堂をやっています。子ども食堂についてはよく「そんなことをやっていて本当に必要な人に届くのか」という意見があります。でも、やっぱり習い事をしていたり、塾に行ったりしている比較的安心な環境にいる子どもたちは基本的にそうした場所に来ないですよね。やはり、安心な環境ではない所にいる子どもたちが多く来ているんじゃないかと思います。そう考えると、子ども食堂のような場を作ることによって、本当に必要な人の近くまで届くのではないかと思っていますし、谷村さんの「ななっこ料理道場」も支援が必要な家庭の子どもたちの近い所まで届く取り組みだと思います。さらに個別支援とも結びつけていらっしゃる所がすばらしいなと思って聞かせていただきました。

堀井さんの取り組みの話ですが、思春期の子どもの支援は本当に難しい。少しだけ私が出会った男の子の話をします。彼は21歳の若者なんですが、この間会った時に彼が泣きながら「僕は来世で幸せになっていいかな」と言っていたんです。まだ21歳ですよ。まだまだ若くていっぱい未来がある子なのに、こんなことを言うわけです。この子が3歳の時に両親が離婚して、それからこの子は児童養護施設に入所していました。小学校に上がる時にお父さんが再婚して、新しいお母さんと一緒に迎えに来ました。「これでやっと自分は幸せになれる」と思ったら、今度はお父さんと新しいお母さんの間に子どもが産まれて、自分の居場所が家になくなってしまった。そうなると、何とか早く家から出ていって自分の家庭を築きたいと思うわけです。

10代で父になったり母になったりする子も、同じように早く家を出たいという思いから若くして親になることが多いのですが、彼の場合はみんなよりもたくさん稼ごうと思ったと言うわけです。彼が言うには、たくさん稼ぐためには危ない仕事しかないとのことでした。家を出るわけだから、住む所と仕事の両方の面倒を見てくれる所で仕事をするしかない。そして、まだどこでも雇ってくれるような年齢ではない。そうなると、いわゆるかたぎじゃない仕事にしか行きようがないわけですよね。結局、犯罪に近いようなことをいろいろとやって月に数十万円稼いでいたそうです。でも、危ない橋を渡りながら

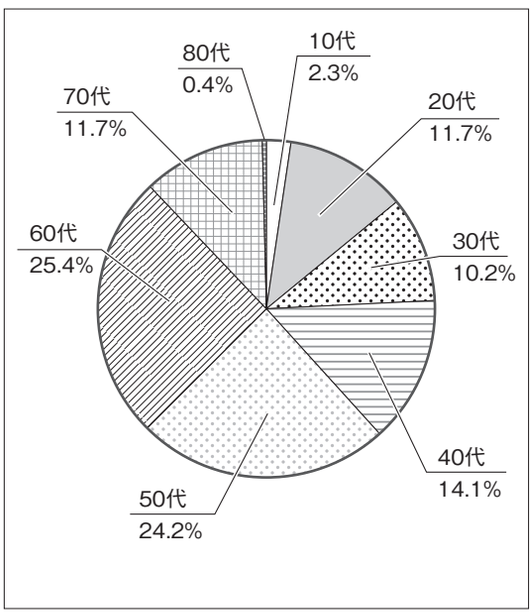
生活をした結果、最後は体を壊してボロボロになって、21歳でホームレスになって私の前に現れたんです。私たちはそんな子どもたちを見て、「何でそんな犯罪に近い世界に行っちゃうの」と思うわけですけど、それは丸ごと支えてくれるような相談機関がないからです。居住支援はこっちの事業です、生活指導はこっちの事業ですとそれぞれに分かれています。生活指導をする人は指導だけしに来る。そうすると支援を受ける側としては、家の世話をしてくれるわけではないのに指導だけしにくるうるさい人と拒否感が生まれるわけです。でも堀井さんのように、家に住ませてくれて、離乳食の作り方まで教えてくれる所までやってくれてと丸ごと付き合ってくれたらそうは思わないと思います。お話を聞いて、堀井さんはちょっと私と似たところがあるなと感じました。

井上さんのお話の中で、大切なのは想像力と言われていたことに共感しました。私たちは自分たちの住んでいる文化がどの人たちにも同じように共通していると思い込んでいて、他の文化がある多文化の社会で共生することに対して本当に弱い部分があると感じます。この間、私が出会ったイギリス人のお子さんは、修学旅行に行きたくないと話していた。何で行きたくないのかと聞くと、他のみんなと一緒にお風呂に入るのが嫌だからということでした。我々が暮らしていく中で本当に当たり前に感じていることが、外国にルーツを持つ彼らにとってはすごくストレスになっているということに気づけるかどうか。やっぱり想像力ですよね。「優しくない人なんて実は一人もいない」と思います。でも、「正しさ」という自分たちの持っている基準の中で、正しいか正しくないかで分けて、「あの人、外れてるよね」「ちょっと違うよね」という所を排除してしまう。でも、その人の状況をちゃんと知ることができたら、本当は違うはずなんです。知ることによって人は優しくなれるんじゃないかなと思うんです。

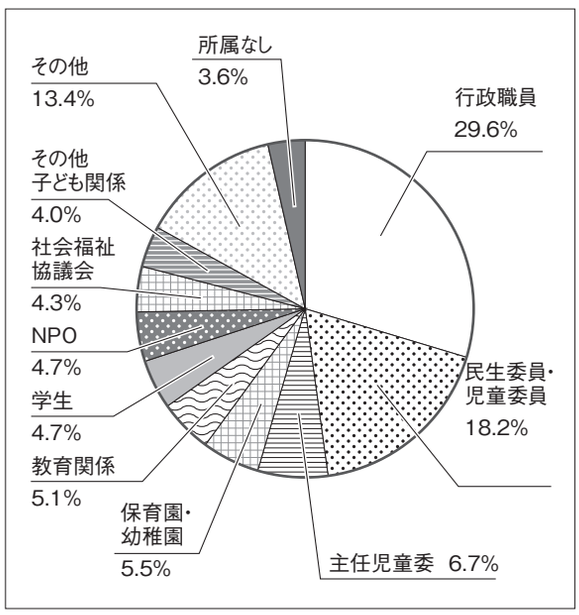
最後にフォーラム全体の感想を少しお話させていただきます。最近では子どもの貧困の問題についてよく話題になりますが、割合として6人に1人は貧困の子どもがいると言われています。それほど苦しい世帯の人たちが我々の身近なとこにあって、いろんな立場の人がいるということです。その状況は決して人ごとじゃない。誰だって、いつだって、そんな状況に置かれる可能性がある。そういうことを身近に感じながら一緒に考え合う、こういうフォーラムがある福岡市はすばらしいなと思いました。

## 参加者アンケート

**参加者年代**(回答者258名)




**参加者職種**(回答者258名)




### アンケート　自由記述欄から

※（　　）内は、職種

- 実践者のリアルな話には温度があり、より身に染みた。(NPO)
- あきらめかけている人に周りがあきらめずに声をかける。さみしいと思っている人を一人でも減らしたい。(主任児童委員)
- 子ども・大人・高齢者・外国人・あらゆる人に差のない支援が届くような活動を知る事ができ、有意義な話だった。(SSW)

## パネル展　同時開催

市民フォーラムに参加した市民の皆様に推進委員会の活動を紹介し、参加者との交流、意識啓発を図ることを目的にパネル展を開催しました。

団体の活動を紹介するパネル等の展示、リーフレットの配布、物品販売、募金等を行い、　休憩中等に多くの参加者にお立ち寄りいただいたほか、推進委員会の参加団体同士がお互いの活動を知る機会にもなりました。

### 出展団体

- 特定非営利活動法人　ワーカーズコープ
- 特定非営利活動法人　子どもNPOセンター福岡
- ファミリーシップふくおか(里親養育支援共働事業実行委員会)
- 特定非営利活動法人　SOS子どもの村JAPAN
- 福岡市里親会(つくしんぼ会)
- 福岡市乳児院児童養護施設協議会
- 社会福祉法人　福岡市社会福祉協議会
- 一般社団法人　福岡県助産師会
- 福岡市民生委員児童委員協議会
- 特定非営利活動法人　にじいろCAP
- 特定非営利活動法人　ふくおか・こどもの虐待防止センター
- 特定非営利活動法人　チャイルドライン「もしもしキモチ」
- 福岡市(里親リクルートなど)
- 福岡市子ども虐待防止活動推進委員会

# 「虐待死ゼロのまち」をめざして
# 私たちに何ができるか、話し合い、行動しましょう。

虐待による子どもの死亡事件があとを絶ちません。
こんな悲しいまちにしないために、私たちに何ができるか、考えましょう。

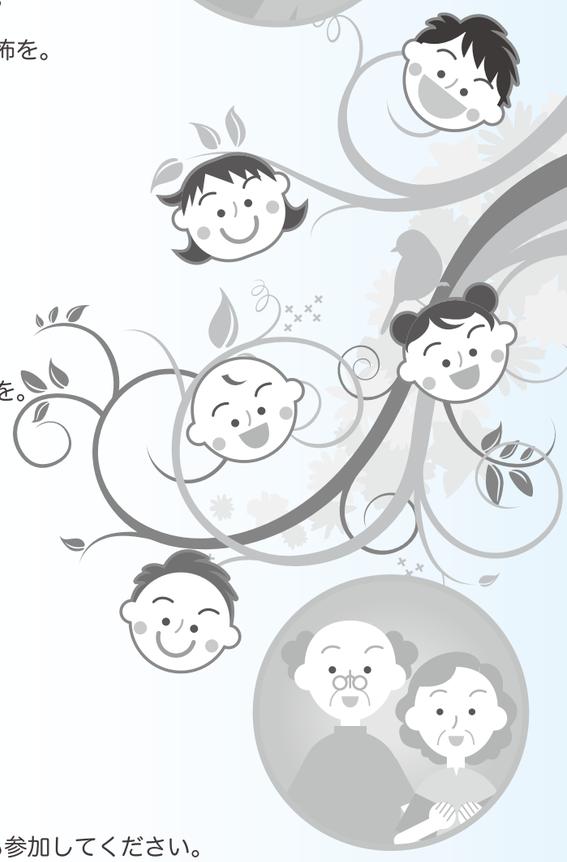
想像してみましょう。
抱きしめてもらいたい母親に、突き放された、その子の悲しみ。
ほほえんでもらいたい父親に、置き去りにされた、その子の恐怖を。

耳を傾けてみましょう。
死んでしまったその子が、命をかけて訴えたかったこと。
短い生涯を終えなければならなかった、その子の無念に。

思い出してみましょう。
泣きやまぬわが子に、思わずイライラした、あの日。
涙によごれて眠ってしまった顔に、胸しめつけられた夜のことを。

思い出してみましょう
わが子の誕生に感動して、涙したあの日。
つらいときに私たちの心を癒してくれた、あの笑顔を。

私たちに何ができるか、話し合いましょう。
そして、立ち上がり、できることから行動しましょう。
市民も行政も、地域も企業も、そしてメディアも。



あらゆる人に呼びかけます。
「虐待死ゼロのまちをめざすネットワーク」に、どうぞあなたも参加してください。

福岡市子ども虐待防止活動推進委員会